住・まちづくりフォーラム かわら版（仮題）

ニューズレター第10号　　1996年3月14日

特集　第10回 住教育フォーラム

コーポラティブ住宅と環境学習の間を読む

子どもの目線からの住まい・住環境づくり

10

発行／財団法人　住宅総合研究財団

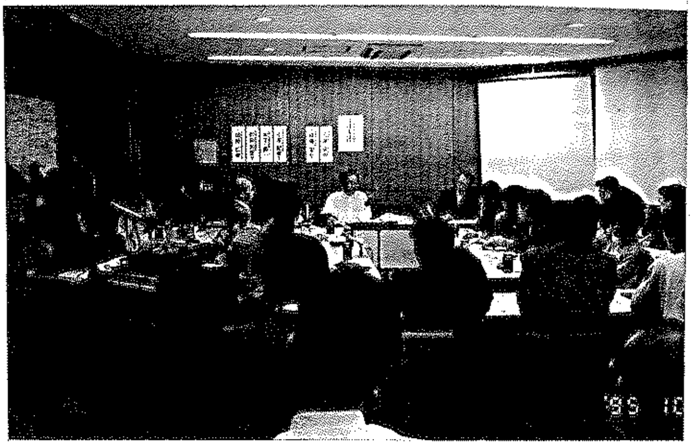
第１０回　住教育フォーラムの記録

主催　（財）住宅総合研究財団　住教育委員会

テーマ　コーポラティブ住宅と環境学習の間を読む

子どもの目線からの住まい・住環境づくり

・日　　時　１９９５年１０月３１日（火）　午後６時３０分～午後９時３０分
・会　　場　住宅総合研究財団　会議室
・講　　演　三浦　史郎氏（象地域設計）
　　　　　　延藤　安弘氏（名城大学理工学部教授　住総研住教育委員会委員長）
・コーディネーター　東京学芸大学教育学部教授　住総研住教育委員会委員　小澤紀美子
・ファシリテーター　千葉大学園芸学部助手　〃　木下　勇
　〃　筑波大学附属小学校教諭　〃　町田万里子
・記　　録　跡見学園女子大学短期大学部助教授　〃　加藤　仁美
・参 加 者　建築系・教育系などの研究者・実務者、並びに大学院生・学生、
　　　　　　まちづくりなどの活動家、関心のある主婦や高校生の方など４７名



・この「住・まちづくりフォーラムかわら版」は、住教育フォーラムの開催記録を仮にまとめたものです。将来、何回かのフォーラムの成果と、各委員の皆さんによる研究論文を合わせて、書籍として刊行する予定ですので、ご期待下さい。

・表紙デザイン、裏表紙カット＝町田万里子
・編集・文責＝事務局　間宮昭朗、小菅寿美子、平井なか

○延藤　今回は、「コーポラティブ住宅と住環境学習の間を読む」というテーマを掲げました。コーポラティブ住宅の概論はあえて省きたいと思います。

住学習と切り結ぶというような視点を立てたことには2つあります。1つは、多くのコーポラティブ住宅は、子どもの目線から住まい環境をデザインしたいという狙い目を持って事が進められております。背景には、現代社会の子どもが、いろいろな所でうめいているその状況を単に批判するのではなくて、住まい環境をつくるという行為を通して、その問題を乗り越えようという意味で、コーポラティブ住宅の実践的成果の中には、子どもと周りの環境との間に濃密な関係性が見えているものがいくつかあります。

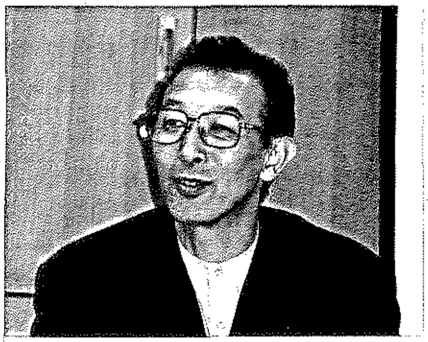
いま1つは、コーポラティブ住宅を造るまでのプロセスが、住来の専門家だけでやる造り方ではなくて、住み手の軟らかい行動から始まって、楽しいアクションを連鎖させながら、だんだんハードなデザインに至るという、そんな進め方をしているものがよく見られます。後々の生活面でも、そのエネルギーが継続されて、子どもが楽しい経験の中で、いろいろな環境、住まい、あるいは暮らしをめぐる大切なことに目覚めていくという、そんなデザインのプロセス面に、環境学習のプロセスと相通じるものがあるのではないか、という視点です。

本日は、東の方から三浦さんにお話をいただきまして、後半に私が西の経験について触れてみたいと思っております。コーポラティブ住宅を簡単に言いますと、「住み手ありき型」と、「土地ありき型」と2つあります。三浦さんは、東京都葛飾区でコーポラティブ住宅を、「住み手ありき型」で、いわば子どもがワクワクするような状況を引きずりながら、住まい環境をつくっていくというソフトなアプローチを丁寧にたどっておられるプランナーであり、デザイナーであります。

後半には私が西の状況をお伝えして、全体を通して議論を皆さん方と共に深めてまいりたいという筋立てで進んでいきたいと思います。

◎コーポラティブ住宅と環境学習の間を読む

東のコーポラティブ住宅のケースから考える



象地域設計・三浦史郎氏

○三浦　象地域設計の三浦です。**クラフト**住人でもあります。**クラフト**というのは、象地域設計で応援した2つ目のコーポラティブ住宅です。いま、延藤先生の方からお話がありましたが、なぜ住み手ありきかというと、土地ありきというのは、多分企画先行と言うか、仕事としてとらえることが多いと思うのです。我々は、どちらかというと、仕事としての関わりよりは、住み手の人たちから、あるいは住み手の人たちと一緒にやることで、自分たちも多くのことを学ぶことができるし、一緒に感動を共有するというおまけが付いて、なおかつ生活もできるということで、一石二鳥なものですから、住み手ありきということを選んでいると言えるかと思います。

●コーポラティブ住宅とマンションの違い

我々が住宅を見るときに、例えば、公営、公団、公社、あるいは一般の分譲マンション、それから戸建てというような、所得階層別の居住というとらえ方があると思います。そうした所得階層別の居住というのは弊害を生み出している。どういう弊害かというと、違いを嫌って画一化する。あるいは、一方向的な価値観、みんな同じ方向を向いた価値観で、ある種の安心を得る、そういう現象を生み出したと言っても過言ではないのではないかと思っています。こうした考え方が、いつしか住み手に表面的には浸透しながら、本音の所では、いつの日にか脱出する対象として集合住宅を見るということを多く植え付けてしまったのではないかと思っている所です。

象地域設計が事務局になって、「コーポラティブ住宅づくり友の会」を1983年にスタートしています。例えば、いま私の手元にあるニュース31号を見ますと、**クラフト**という所に住んでいる小学3年生の作文があります。

「僕は、**クラフト**に来ていろんなことをしました。クリスマス会やゲートボール、そば打ちなどがあってとても楽しかったんです。今度は何をやるか楽しみです。このごろは、宴会みたいなことはありません。でも、また何かやるかもしれません。僕は、毎日宴会やパーティがあるといいなと思いました。でも不思議です。なぜかというと、**クラフト**のおばさんやおじさんは、会ったばっかりのときから、知り合っているみたいにみんなと話しているからです。僕は、もう引っ越しなんかしなくてもいいと思いました」

この最後の、「僕は、もう引っ越しなんかしなくてもいいと思いました」というのは、多分自分たちの生活を、いわゆる器に合わせながら暮らす、自分たちの生活が膨れてくると、どうしてもその生活の場所を移さなければいけなくなってしまう、といった実態が最後の1行に出ているのです。

私たちは、何度も引っ越しをして歩くということではなく、ずっと長く住み続けられることを前提にしなければ、コミュニティというのは良好な形で育たないのではないかと考えているので、コーポラティブ住宅という手法で、参加型の、しかも自分たちの手づくりでやっていけるという、そういう住まいづくりを提案して、一緒にお手伝いをしているということです。このような子どもたちの延藤流でいうつぶやきが、「コープ住宅づくりニ

図1　「コープ住宅づくりニュース」

ュース」（**図1**）の表紙には毎回のように載ります。それを私たちとしては大事にしたいと考えています。

コーポラティブ住宅と一般分譲マンションの違いは何なのだろうか。別にコーポラティブに限らず、分譲マンションでも、仲の良い住み手という集団ができるのではないか。当然そういう所はたくさんあると思います。ただ、違いは何かと言われれば、空間のコンセプトと言うか、住み合うことをデザインして形になっている。つまり、みんなが居心地良く集まれる場所、これは、いわゆる集会室ということではなくて、建物、あるいは敷地、あるいは敷地の周辺まで含めた形で、みんなが住み合える、共同で物事が進められるという空間のデザインが、何らかの形で当初からもくろまれている。

それから、ソフトの方ですが、生活のルールというのは、一般にマンションの場合には規約になりますが、そういうルールも、集合住宅で楽しく住むということに対応した形で作られるのがコーポラティブ住宅です。一般の分譲マンションの規約では、どうやって上手に管理ができるのか、どうやったら危険がより少ないのかといった守りと言うか、責任の所在をきちんとさせなければいけない、そういうジレンマもあるのでしょうが、どうしても「べからず」集になってしまっているのがスタートの段階にあると思います。その後、管理組合などで、いろいろ討議をして変えていっている所もあると思うのですが、スタートは、空間についても、生活のルールについても、楽しく住むということに対応していないというのが、コーポラティブ住宅との違いだろうと思います。

公団の集合住宅造りには、初期の方も含めて、空間づくりにかなり工夫があった、と見ています。それから、長い積み重ねが良好なコミュニティを育てた所も少なからずあります。私も、いくつかは知っています。ただ、そういったものを最近の建替え住宅では、スケールアウトも甚だしい、超高層に近い高層の建物で、1つ1つの住宅のクラスターと言うか、密度が高く、コミュニティを育てるのにちょうど良い形になってないと見受けられます。そんなこともあって、コーポラティブ住宅の場合には、そういうハード、ソフトの面で一味違う、子どもたち、同時に大人たちも育っていける環境づくりができているのではないかと思います。

●自分を知る、他人を知る

コーポラティブ住宅のスタートの頃からそうですが、いままで、生まれも育ちも全部違う、環境も違って、家族の形態もずっと違う人たちが一緒に集まって住むということになるので、まず自分を知るということ、それから他人を知るということ、そこからスタートするということがあると思います。それが、子どもたちにもそのままの形で受け継がれていきます。すべての住み手が、家族の延長としてとらえられているというのが、親密なコミュニティの基礎となるであろうと思います。

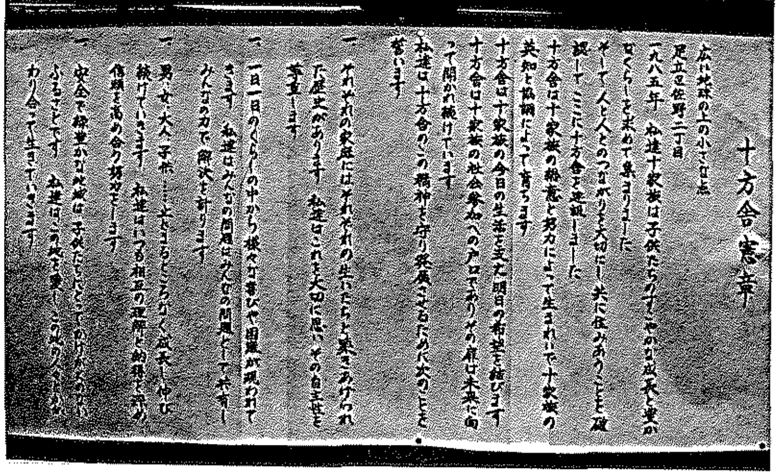
そこには、生活者の家族の形態、つまり単身の方がいる、あるいは子どものいない方がいる、あるいは、いわゆる標準世帯がある、子沢山のうちがある、いろいろ家族の形態が様々であるということ。暮らし方についても、朝早い人から、夜遅い人までいる。会社に行かないで、家の中で仕事をしている人も含めて、いろいろな職業の方がいる。そういったことは、自分の家族の中だけでは、つまり、大人というのはこういうことをやっている人だ、という感覚でしかとらえられないのではないかと思うのです。そういう部分が、複数の家族を通して、それから日常の遊びだとか、そういったものを通しながら、日曜日にいるお父さんだとか、月曜日にもいるお父さんだとか、いろいろなことがわかってくる。つまり、お父さんというのは、日曜日にいる人だと思っているのが、隣のおじさんはしょっちゅういる、というようなことがわかってきます。そういうことと自分のうちを対比しながら、違いの中で自分の生活が認識できてくるのではないか。

また、一時的にハンディキャップをもった人だとかあるいはずっと長いことハンディキャップに苦しんでいる人もたくさんいるわけですが、そういった生活がどうやって目に触れるか。私たちが小さいときには、そういうことがほとんどなくて、大体が人前に出てこない生活をしていた。コーポラティブの中では、それが一緒になってちゃんと生活ができている。そういったことも、自分たちの生活の中で、違いの認識と言うか、あるいは共通点の認識というようなことで変わってくるのではないか。

それから、子ども、あるいは大人、それから子どもたち、大人たちという形でつながりが非常に広くなっていくという地域との関係もあります。

●みんなで確認する

その次に出てくるのは、「みんなで確認し合う」とい



スライド1　十方舎憲章

うことです。つまり、自分以外の人たちと自分との間で、何が合意できることなのかを確認するということだと思います。

十方舎という所では、生活の規約は持っていません。「十方舎憲章」というのが規約に当たります（**スライド1**）。決め方としては、前段を除いた「1」と書いた4つのことが憲章として自分たちの共同生活のよりどころにしているわけです。これをザッと読んでみると、「それはそうだよね」と誰でもそう思うことだと思います。集団という形で意志確認をして、文書で明文化するというのは、多分一字一句言い回しといったことにこだわりも含めて、20人とかそういう人数で討議すると、どうしてもなかなかまとめにくいということは、実際の経験としてはあるわけです。それでもなお全員で話し合いをして、こういう形にしていくという所が、大変大きい意味があるのではないか。このことは、その後の共同生活のよりどころになっていると言えます。

みんなで確認してスタートした生活がどういうふうにされるか。例えば**クラフト**では、子どもが15人いるのですが、入居時の年齢で1歳から14歳。昔で言うと、14歳ぐらいの違いというのは、8人兄弟や7人兄弟というと、こういう開きはあったのですが、最近はあまりそういうことがない。こういう異年齢で外で遊んで、あるいは、うちの中ではいろいろ教え合ったり、面倒を見たりというようなことはあまり行われていないのではないか。そんなこともあって、「異年齢集団」という所に1つ特徴を見付けました。

子どもだけではなくて、大人の方も33〜49歳。これは入居時ですので、現在は10歳ぐらい年が行っています。そうすると、14歳の子どもは24歳になっていますし、33歳のお母さんは43歳になっています。そうすると、その比率がだんだん小さくなってくる。比較的生活が、子どもと大人の間に世代のギャップというのはそんなに大きく出てこないというような暮らし方を時々見ることがあります。そんなこともあって、異年齢集団の中に、子どもと大人も一緒に入れてみました。

クラフトの中で、「たくらみ」を持ってやるイベントには、もちつき、芋煮会、お祭り、山登り、スキーへ行ったり海水浴へ行ったり、というようなことがあります。旅行や大掃除、枝打ち、あるいはペンキ塗りをみんなでやるとか、ソフトボールだとか、外の人を連れてきて、誰それさんを囲む会みたいなことをやっています。それから、特にたくらんでいるわけではないのですが、「なりゆき」で泥んこ遊びや花火、そば打ちだとか、持ち寄り大会。持ち寄り大会というのは、なりゆきで「今日は一緒に食べようか」と言うと、「じゃあみんなに声をかけよう」というので、みんなが1品ずつ持ち寄ると、結構豪勢な食事になる。

ほかに、「アクシデント」として、水道管が破裂したり、給水ポンプが故障したり。通常であれば、どこかへ文句を言おうかという話ですが、結局自分たちで直さなければいけないということに気がつくわけで、それを、子どもたちはちゃんと見ている。つまり、子どもたちの目線が、いつもこの生活の中に向けられているから、いろいろなことを言葉で言ったり、文字で表したりしなくても、その行動を見ながら子どもたちが育っていくということがあるのだろうと思います。

食あたりというアクシデントがあったのですが、こういうのも、どこそこのおじさんが食あたりになって、どこそこのおじさんが階段から運んでくれて、誰が車で連れていってくれてというふうなリレーを子どもたちが目でちゃんと見ている。ルンという犬が亡くなったときも、その犬がその家庭の中でどういう位置を占めていたかということも、みんなの生活の中で知っていくのです。

スライド2　十方舎婦人の会会合の様子

ここでスライドを少し見たいと思います。

十方舎

●**十方舎**の婦人会です。月に1回土曜日の夜に、こんなふうにして奥さんだけで集まって、夜明けに近い時間までいろいろ話をしています（**スライド2**）。亭主の悪口から始まるらしいのですが、最後は、子育てと言いますか、教育のこととか、学校のことだとかという話に終始するようです。この集まっている場所は、この方の家です。たまたま、このときは8人のようですが、10人とか20人ぐらいが集まれるようなサロンは各お宅にあります。集会室は造ってないのです。

●唯一の共用部分です。公道から、これだけの共用通路があります。非常に大事に使っています。掃除も、子どもたちも一緒にやっています。子どもが一緒に掃除をするというのは非常に大きい意味があります。散らかさなくなりますし、きれいにするということを、日常的に努めるようになります（**スライド3**）。

●共用部分はここしかないものですから、道路にシートを敷いて納涼会みたいなことをやったりします。

●当然共用部分だけでは足らないので、道路の方にはみ出ます。夜は、あまり車も来ないものですから、道路にはみ出て焼き鳥を焼いたり、飲んだりしています。

スライド3　共用部分の掃除（十方舎）

クラフト

●松戸の**クラフト**です。道路から、引き込んで入ってき

ている所は、舗装はしないということで土のままにしてありました。だけれども、それだとぬかるみになってしまって、雨のときなどはなかなか歩きにくいということで、歩く所だけ平板を敷こうではないかというので、みんなでやり始めました。

●全部に平板を敷き詰めてしまわないで、本当に歩く所だけにして、そのほかの所は、とにかく泥んこ遊びできるようにしておこうと（**スライド4**）。もう子どももだんだん大きくなったので、いまは、あまり泥んこ遊びをやりたいと思っている子どもは少なくなってきています。そういう意味では、建物、あるいは周辺は造りすぎないというのも必要なことなのかと思っています。

●大人たちは、そこでは火をたいたり、そばの山から採ってきたタケノコの皮むきをやっている。

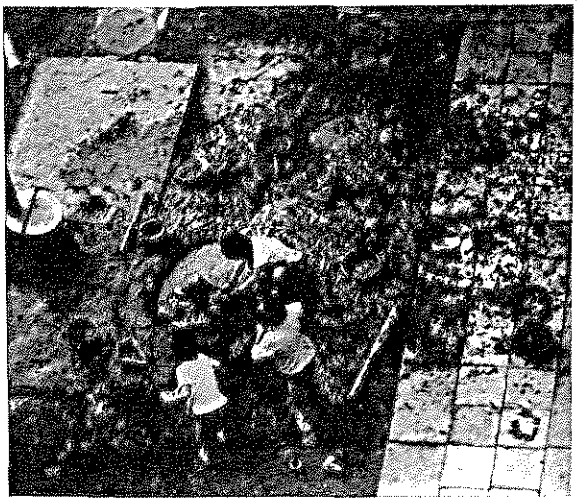
●うどんだかそばだかを練ったりすることになれば、子どもたちも一緒になって出てきて、雑然とやる。

●そういうふうにしてやっていると、道路を通りかかったよそのおじさんとか、知り合いとか、地域の人たちに声をかけて、呼ぶと入ってくるというような形で、だんだんにぎわいができてくる。子どもたちも一緒になってやっている。ほんの猫の額ほどですが、使い方としては結構いろいろな使い方ができる。土地がないと嘆くよりは、いろいろな工夫をした方がいいだろうと思います。

あるじゅ

●これも同じコーポラティブ住宅なのですが、形態は賃貸型ということで、我々が応援したのではいちばん新しい所です。この当時生まれてなかった子がもう２人生まれました。いちばん上の子がもう大学生です。ここもかなり大きな年齢差があります。車いすを利用していらっしゃる方も２人いるものですから、子どもたちは小さいときから、気がついたときに、こういう同じコミュニティの中にいろいろな形の生活者がいるというのが、みんなの中ではごく当たり前に、素直にすんなりと入っていくというような状況だと思います（**スライド5**）。

そんな生活の仕方を、大人が楽しんでいるということがあるのですが、大人も子どもも一緒になって楽しみながらやらないと、一方的に誰かが教える、誰かが習うみたいな話では長続きしないのではないかと思います。この中では、階段の下のほんの小さな広場でも、大げさに



スライド4　泥で遊ぶ子どもたち（クラフト）

スライド5　あるじゅでの交流

言うと出会いのデザインと言うのでしょうか、住み合うための大事な仕掛けとして、そういった所が日常的に愛着を持たれながら、きちんと空間利用されている、活用されているというのは、明らかに参加型で造られたコーポラティブ住宅の優位性だろうととらえています。

もう１つ、ソフトな部分で言うと、住み合うということを前提にして集まってくるという集合住宅、力を合わせる協同で、何か１つのことをやっていくというようなマインドで、同じ時期に共通の課題、共通の苦労、あるいは共通の感動を共有してきたコーポラティブ住宅、コーポラティブ住宅造りの過程で形成されたコミュニティだということが、日常生活のかなり信頼し合えるパートナーという認識を相互に持ち合っている。それが、多分いろいろな場面で出てきているのではないかと考えています。

もちろん四六時中ベタベタしたコミュニティということではなくて、もちろんお酒を飲んだり、けんかをしたりということも当然あるのですが、そこには信頼し合えるパートナーである、というような位置付けがあっての言い争いだったりとかということで、次の日には仲直りと言いますか、話ができるというような関係が、**クラフト**の場合で９年、**十方舎**という所で10年、**クリブ**という所でも８年続いてきています。

そういう所で私自身も暮らしていて、とにかく何よりも一緒に暮らすという安心感が、最後の最後にはそこで大丈夫だという安心感があります。親の生活を、子どもの目線で見て学んでくれているのではないか。私たちも、子どもたちからたくさんのことを学ぶことがあります。

コーポラティブに住む子どもたちは、例えば、子ども劇場というのを地域でやっているのですが、そういう子ども劇場のリーダーになったり、学校とか、自治会とか、生徒会などでも、物事に積極的にかかわっているということを聞きます。私たちは、まだそういう分析をしているわけではないのですが、きっとこれはコーポラティブ住宅造りの、こういう生活の中で得てきた、信頼感に裏打ちされた自信だとか、そういうことがあるのではないかと思っている所です。

西のコーポラティブ住宅のケースから考える

名城大学工学部教授
延藤 安弘氏

主にスライドを混じえて、本日の主題に向かって、具体的に皆さん方と現場で共に考えるというようなやり方で進めさせていただきたいと思います。

ユーコート　（あじろぎ横町、Mポートは省略）

ユーコートを通して考えてみると、日常の種々の暮らしの中で、子どもたちが何か周りの環境のハード、ソフトから、いろいろな養分を吸収していくためには、まず第1に、老若男女、いろいろな世代が交流できるという世代交流のコミュニティが形成されているということが大事なポイントであるように思います。

それとともに、いろいろな世代が交流し合う、様々な多様な活動を受け止めるみんなの広場、共用の空間、コモン・スペースを豊かにする。そして、この共用の空間に可能な限り、この固い人工物を覆うような緑のネット、自然の環境をそこに育てていく。みんなの広場と、手近に触れる自然という、この空間の作り方、自然の育て方というのが第2のポイントであるように思います。そうした共用空間を舞台にしながら、子どもたちが自立的な異年齢の集団を形成していくというのが第3のポイントです。

併せて、こうした環境を舞台にし、そして子どもたちの自発的な活動を支援する大人たちが、さりげなく見守る、そうした親と子の緊張感をはらみながらも、ある種の支援の関係がさりげなく仕向けられている。こうした様々なファクターは、お互いに相互作用を起こして、ユーコートのコミュニティに自然発生的な、あまりきちんとしたプログラム化はされてはおりませんが、非常に軟かい環境学習の仕掛けが萌芽(ほうが)的には見えるのではないかと思います。

●ユーコートの48世帯の住まいは、京都の桂離宮のある所から3、4キロ西へ行った洛西ニュータウンにあります。

●ユーコートというプロジェクトは、アルファベットの「U」の字を描くように、コート（中庭）を囲んで3階、4階、5階という集合住宅として造られました(スライド1)。3,300㎡、ジャスト1,000坪の敷地で容積率155%ですからなかなか密度は高い。

●しかしながら、広々としたみんなの広場が真ん中に居座っています。車は、この建物の足元のピロティ空間に48台分、100%置けます。こちらから出入りするので、中庭空間には一切車は入ってきません。いわば、車の存在をかき消すということで、子どもにとって、車の通行から開放された自由空間です。

スライド1　中庭を囲むように建つユーコート

●ユーコートの子どもに聞いてみますと、自分の子ども部屋は自分のもの、よその子ども部屋も自分のものと言っています。子ども部屋チェーンというような、1つの子どもの生活空間がつながっているという、そういう連続性を持って組み立てられ、そのソフトの仕掛けがおのずから生み出されているというのも、印象的です。

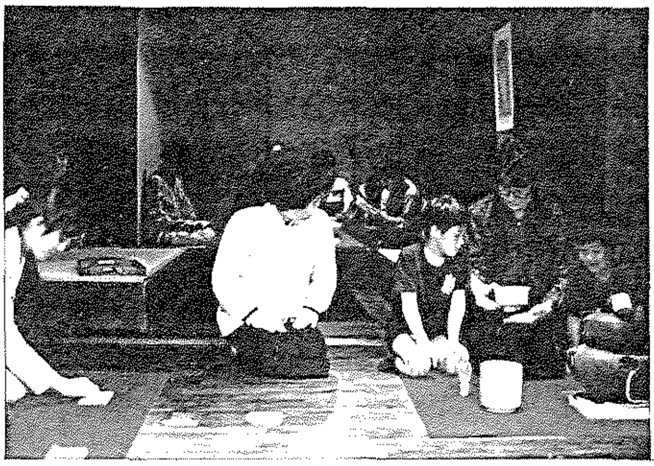
●いろりのある家もあります。これは、お父さんが子どものころ、いろりのある暮らしをしていたという、その思い出の空間化です。温かい火が燃え立っている場所に子どもはよく出入りし、一緒にご飯を食べたりします。

●子ども部屋は、この小屋裏空間に造られています。そこに至る階段は、京の町屋で使われていた箱階段（箱段）という、階段と収納を兼ね合わせたような、庶民の建築的知恵を現代の住まいの中に生かしています。よその子どもがしょっちゅう火の周りに来て、そして上がって、穴蔵のような奥のほうへ行って、好きな本を開ける。子どもにとって何平方メートルのありきたりの四角い空間があればいいのではなくて、子どもの心をワクワクさせるような、変則的な、意外な空間があっちこっちに振り付けられているということが大事なのではないかと思います。

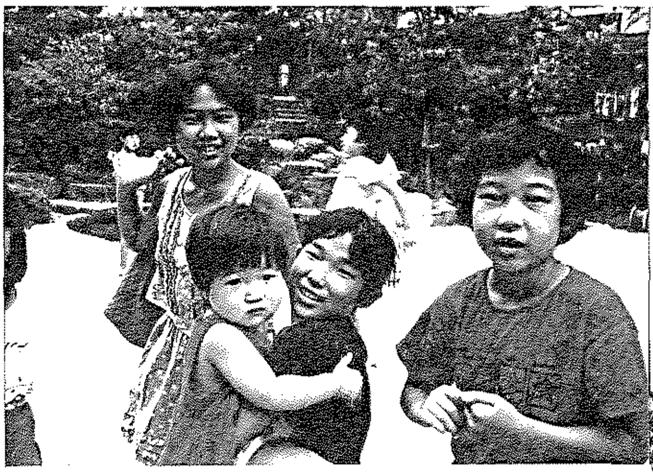
●ある家には、3枚の動く畳があって、日常的には子どもの遊び場になり、非日常的には、このようにお茶席になるような、いろいろフレキシブルな空間の使われ方がなされています。近所のおばちゃんから、お茶のたて方、飲み方、作法を教わるという、近隣のよその親から、機会あるごとにいろいろな知恵や、技や作法を身に付けていく機会に恵まれている子どもたちです（スライド2、次ページ）。

●ユーコート48世帯のデザイン過程では、バルコニーの間を隔てているのをやめて、子どもたちが自由に遊びに行けるようにしようということで、続きバルコニーにしました。

●共同の庭には四季折々、子どもたちの目を楽しませるような生活シーンが織り成されています。



スライド２　お茶会をとおしての交流



スライド３　異年齢集団で遊ぶ子どもたち

●子どもたちは階段を下りてきて、別の階段を下りてきた子どもと出会って、日々偶発的な出会いを重ねていきます。そうした出会いの体験が重なっていく中で、おのずから異年齢の子どもの集団が生み出されてきているということです（スライド３）。人と人の出会いが高まるような空間計画を仕組むことによって、子どもの世界に、自立的な子どものグループ形成を促すような、そういうハードからソフトを仕掛けるような意味がここにはにじんでいるように思います。

●虫取りをする子ども、そして緑の葉の裏側に虫を見付ける子ども、目の高さに命ある存在が見えるといった経験が、日常生活の中で繰り返されることで、理科嫌いや、生き物嫌いの子どもも、だんだん生き物好きになっていくような、自然体の学習のスタイルがここには見られます。

●ユーコートの花暦を作ってみると、見事に年中どこかで花が咲いている、非常に高密度な環境ですが、コモン・スペース、共同の空間に命が息づいているという場所に育っていっています。

●子どもは、ときにはオシロイ花をちぎって遊ぶ。それは、ちぎって遊ぶ楽しさであるとともに、蜜を吸う楽しさでもあります。例年春先には、共同玄関のアプローチ際に花を植えますが、いつも子どもたちが踏みつけてしまって、赤茶けてしまいます。しかし、ここの大人たちは、叱ることはしませんでした。

●ある年の春先、今年の子ども会の世話をすることになったお父さんが、子どもらに呼びかけて、「今年は大人がやるんやなくて、みんな子どもでやってみようか」と、子どもを集めて、ここに花を植えました（スライド４）。

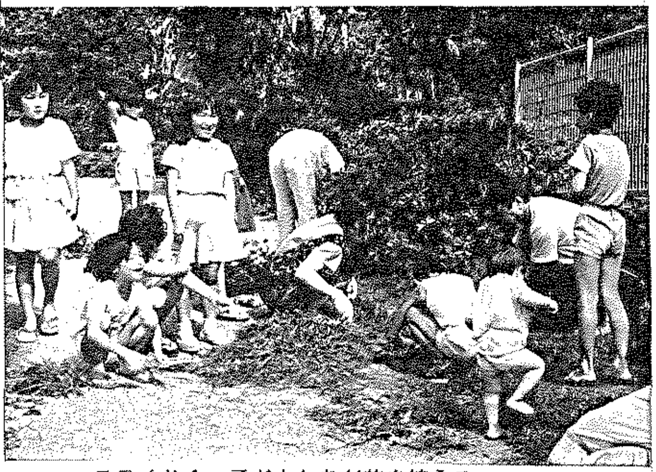
●その年、観察を続けておりましたら、この年はずうっとこの場所には緑が、花が絶えることはありませんでした。子どもを、何をしてはいけないという禁止の世界に追いやるのではなくて、むしろ子ども自らが花を育てる、そして命あるものに対する感受性を深めていくという関係が深まっていったわけです。

●翌年には、このように子どもたちの提案によって、見事にチューリップでユーコートという花文字がデザインされまして、大人も驚きでしたし、それ以上にランドスケープ・デザイナーもびっくりでした。こういう専門家や大人の視点を超える、技を超える、そんな手法が、子ども自らによって提起されている。子どもが日常の生活環境の中で、緑に対しての愛着を深めていく、その自然なプロセスが、子どもたちにとって思いがけない発想やイマジネーションを高めることになっているのではないかと思います。

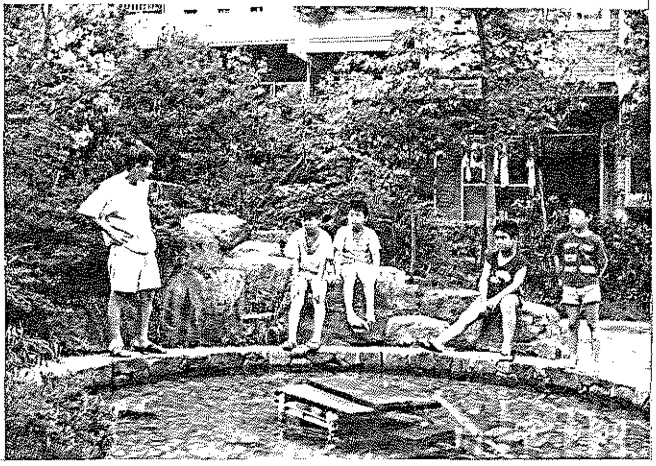
●子どもたちは、春先から秋深いころまで、多様に池とかかわっています。造る段階では、池は煩わしいから、管理が大変だし、子どもがはまって死ぬかもわからんからやめようという意見がありました。

●水は危険だから取り去るというのは、大人の勝手な発想でありまして、むしろ、このように子どもにとって身近な環境にかかわれる、生きた水があるということはとても大事な環境要素ではないか、ということを伝えてくれていると思います（スライド５）。

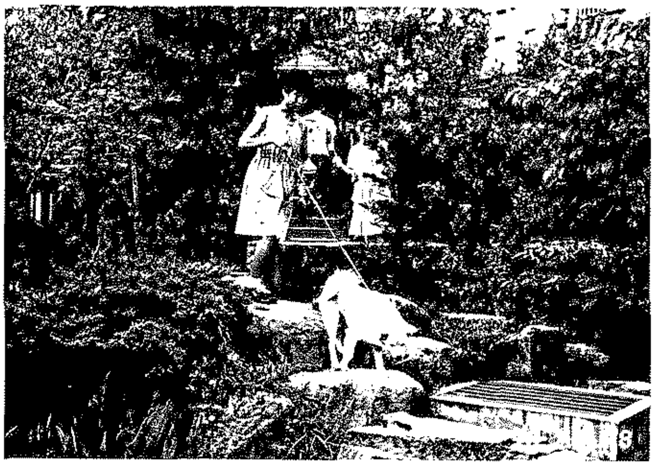
●安全性という点では、よその大人は、周りの子どもたちの様子をそっと見守ってやる、いわばナチュラル・サーベイランスと言いましょうか、自然監視という、人間関係をテコにしながら、子どもの生活空間に水を復権することの必要性と可能性を見せているような気がします。



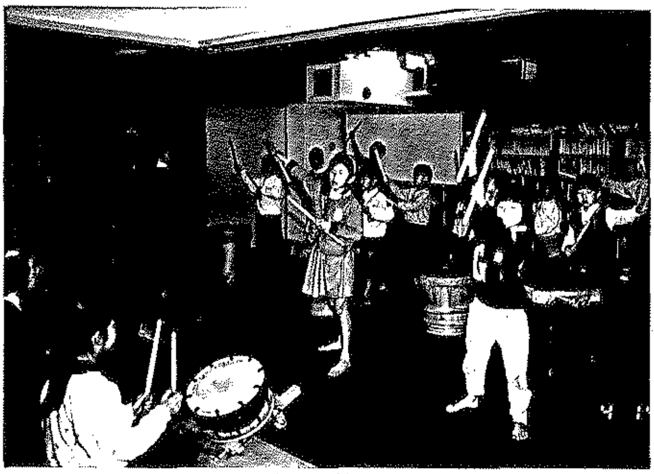
スライド４　子どもたちが花を植える



スライド５　中庭の池を囲んで



スライド６　ユーコートでの犬の散歩



スライド７　和太鼓の練習風景

●池の管理というのは大人がやっているわけではありません。大人が支援しますが、子ども自らが、池の管理や世話にかかわっています。煩わしい管理が、子どもの楽しい遊びに転化するのも、子どもの目線から、住まい、まちづくりを進めていくときの１つの示唆であると思います。
●ユーコートを造る段階では、いままでの集合住宅は、分譲も賃貸も一切ペット禁止になっていました。けれども、あれはおかしいのではないかという議論の末、飼うことが自由になり、今日では犬が６匹と猫が９匹、この48世帯の間に住んでいます。犬は、飼っている子どもが散歩させるだけではなくて、よその子どもも散歩するという、いわば「コモン・キャット」「コモン・ドッグ」というような仕組みが生まれているのも面白いところです（スライド６）。
●子どもたちはいじめが大好きで、特に小さい子は猫を見付けると、棒切れで突っついて遊ぶわけです。でも、いたずらをしながら、命あるものの危うさを直に知るという、この具体的な体験が大事ではないか。行きすぎたことをやると、年長の子どもが注意します。そういう意味で、異年齢の集団の中で、生き物とともに生きるという、そういうスタイルがなんとなく身に付いていきます。
●９割が共働きですので、学童保育をこの集会所でみんなで運営して、プレーリーダーが雇われています。
●集会所は和太鼓の練習の場になったりします（スライド７）。
●バイオリンの上手な子どもたちは、よその京都の和楽器のプロの集団と一緒に、そして同じユーコートのアンサンブルの仲間たちと演奏会を住民の前で披露するといった創造活動にも乗り出しています。
●夏休みになりますと、人形劇が、子どもたちの笑いと共感を誘うようなイベントになり、集会所が、地域社会周辺の子どもも呼びながらの楽しい場になっていきます。
●夏の祭りのときは、お神輿をみんなで作るとか、ユーコートのお祭りをポスターに描いて、周辺に貼っていくとか、そういう準備の活動をみんなでやります。
●お父さんたちが乗り出して、櫓を組み立てる。
●それをそばで見ながら、子どもたち自ら、こうした楽しいお祭り、直に何かを作り上げていく、ワクワクするような臨場感に満たされたプロセスに身を置いています。
●夏祭りのハイライトは、住民たちの日ごろの練習の成果を、周りの地域住民と共に楽しみ合う、というような場になっていきます。
●また、夕方は和太鼓の演奏会が行われまして、小さな子どもから大人まで、高校生の女の子も混じって、こうした和太鼓の演奏を披露します。
●ニュータウンでありますから、地域社会に根ざした生活文化がない所で、毎年手作りのお神輿を、子どもと親と一緒になって作り、黙々と地域を練り歩き、共に地域に根ざした文化を起こしませんかといったことは、何も語りません。
●また別の日には、よそのお父さんが、自分の子どもを育て上げたお父さんですが、周りの子どもを集めて紙芝居おじさんになっています。どこの地域でも、いまごろの子どもはファミコンやテレビゲーム漬けになっておりますが、むしろ、子どもが育つ過程で、仲間ととっ組み合ったり、土や水、緑とたわむれるのが大事だということで、まるで「月光仮面」や、「鞍馬天狗」のような役割をするソーシャル・アンクルとしての役割を果たすお父さんが、自然発生的に生み出されたりしています。
●また、おばあさんは、ある年の夏祭りの前に、「今年はみんなでワラジを作ってみようか」と言って、農家に行ってワラをもらってきて、木づちでトントンと叩いて、ワラジを作りました。こうして、日本の地域社会に潜む生活価値を、あるいは伝統を、世代から世代へさりげなく受け渡そうとしています（スライド８）。
　コーポラティブ住宅というのは、軟かい、楽しい行動を起こしながら、だんだん物づくりに至る。私たちは、そういうのを Action Oriented Planning と呼んでおります。先ほどの東京の事例も、あるいは西のほうの事例も、いずれも物づくりありきという、いわば専門家が先に絵を描いてしまうのではなくて、子どもも大人も、何か楽しい出来事に身をさらしながら、そこで意識を高めていき、意識をエネルギーにしながら形を作っていくという、Action Oriented Planning のプロセスの一端をかいま見ていただいたのではないかと思います。

スライド８　世代間交流で伝承される

Animation Oriented Learning

環境学習のあり様ということを私たちは議論しておりますが、それにプランニングの方法、コーポラティブ住宅づくりの方法と照らし合わせて１つの言葉を与えますならば、アニメーション。動画、動く映画のアニメーションを思い描くので、ちょっとピンと来ないかもわかりませんが、ここで言うアニメーションというのは、魂を生き生きとさせるという本来のアニメーションです。アニマというのは魂のことですので、まさに子どもが生き生きと心を湧き立たせていく、何か子どもの意識を高めていくというのがアニメーションです。それを Animation Oriented Learning というふうに言うならば、ちょうどコーポラティブ住宅づくりのプランニングの作法と環境学習の進め方に相呼応するものがあるのではないか、というのが言いたかったポイントの１つです。

もう１つは、子どもの視点から、ハード、ソフトの環境を整えようということが回り回って、日常、非日常の子どもの遊びの自由な世界を開くとともに、環境という空間をつくるだけではなくて、主体としての子どもの集団、そういう自立的な子どものグループ形成を促すという点でも、１つの接点が見えているのではないかと思います。

環境学習というのは、非常に多義的で、広い意味をはらんでおりますが、本日、コーポラティブ住宅のいくつかの事例を通して、１つの定義を与える試みをするならば、環境学習というのは、子どもが周りの環境と効果的に相互作用、相互浸透する能力としてのコンピテンス。コンピテンスというのは、心理学で言う、有機体が周りの環境と生き生きと作用を起こす能力のことですが、そういうコンピテンスを自在に高めるプロセスが環境学習なのではないか。

言い換えると、生活ありき型のコーポラティブ住宅では、あるテキストや、ある確定されたプログラムの下に、住民や子どもを引っ張るのではなくて、むしろ、無意識のうちに意識が変わっていく。意味ある偶発性の下に、子どもの心が内面から変わっていく。そうした無意識のうちに意識が変わっていくような、ワクワクする、生き生きとした、楽しい活動はおのずから子どもの魂を活性化させる。それが、Animation Oriented Learning（ＡＯＬ）ということになるのではないか、ということです。

人間・環境系生成システム

その場合の環境学習における「環境」とは何か。２人の話を束ねてみますならば、６つの輪がお互いに関係を持って「環境」という包括的な概念の捉え方をしているように思います（図参照）。１つは、人工空間系、もう１つは自然生命系です。**人工空間系**というのは、共用空間がいかに豊かに仕組まれているのか。あるいは、住戸の内側に閉ざすのではなくて、いかに外側に開くかという、その開放性の仕掛け。

自然生命系というのは、狭い共用空間の中にも、ちょっとした土があると、子どもは驚くべき冒険の場に、泥んこ遊びの場に変えてしまう、そういう土があったり、水があったり、ときには火があったり、そういう始源的な要素。それから緑、そして虫、鳥という有機的な生命体としての、自然のエコロジカルな関係。家の内外に風とか、光とかという環境エネルギーをたっぷり活かすことによって、人工的な環境、人工的な装置で人々が暖を取ったり、冷を取ったりしている現代社会、地球環境共生の時代にあって、住まう日常の経験の中で、環境エネルギーをうまく活用することに、自然になじんでいく、そんな仕掛けがどのように組み立てられているのか。

３番目は、**人間関係系**と言いますか、子どもの自律的な年齢集団とか、他世代の交流とか、あるいは親と子がある緊張関係を取り持ちながら、親がさりげなく支援をしている関係。レファレンス・パーソンというのは、いわば、子どもにとって頼りになるおじさん、先ほどソーシャル・アンクルという社会教育学の言葉を引用しましたが、これと同じ意味です。子どもにとって、親や先生も頼りになるけれども、よそのおじさん、おばさんで、困ったときに、「あのおっちゃん、おばちゃんに聞いたら何でもわかんねん」とか、「助けてくれんねん」という、そういうのがレファレンス・パーソンであり、あるサークルを形成しておりましたらレファレンス・グループであります。そういう人間と人間の間柄の中に、子どもが安心して育つ関係が見えているのではないか。

４番目は、**集住文化系**という、いわば日常の生活のリズムとか、あるいは生活のルール。先ほども三浦さんが話されましたが、規約という押し付けがましいものではなくて、むしろ生活の中で、おのずからみんなが求めるあるルールを導き出していく。ルールで押し付けるのではなくて、心のおもむくままに、ゴミを集めたり、掃除をしたりする。水の世話をしたり、そういう活動がとても楽しいことに変えられていく。みんなが環境管理すること、楽しさを持って煩わしさを乗り越えていくような、ある価値観をみんなが共有し合うと、１つの集住の文化に形成されていくのではないかと思います。日常だけではなくて、非日常的な出来事の多彩さ。三浦さんのおっしゃる、「たくらみ」の多彩さということが、豊かな集住の文化を育てていくのではないかと。

そうした空間の系列と、ハードの系列と、人間、あるいは文化というソフトの系列をうまく取り結ぶためには、**体験活動系**という、アクションの系が要るのではないか。擬似体験があまりにも現代社会は広がりすぎであるけれども、コーポラティブ住宅の中では、本物と触れるという、直に何かを体験することの喜び、それが極めて子どもの感性を内部から揺さぶっていくのではないか。

同時に、**創造活動系**。与えられるのではなくて、自ら創るというクリエイティブな、物事を創ることに習熟していく人間的な喜びの世界を開いていく。そのことによって１人ひとりの子どもが自分らしくなっていく。

このようなことで、全体として「環境とはなんぞや」という知識を得るというよりも、環境とのかかわりを大切にする姿勢。この環境は、単なる自然、あるいは人工としての共用空間という物だけではなくて、人間は、人間にとって最大の環境であって、人間に対しての軟かい感受性を開く。固い知識の体系というよりも、軟かい感受性とか、あるいは創造力の世界を開いていくことが、コーポラティブ住宅における自然体としての環境学習の仕掛けとして意味をはらんでいるのではないか。

こうしたことを、一般の居住地や、一般の地域社会において、どのように適用できるのか。これは後半で時間がありましたら、皆さん方と共に討議したいと思います。

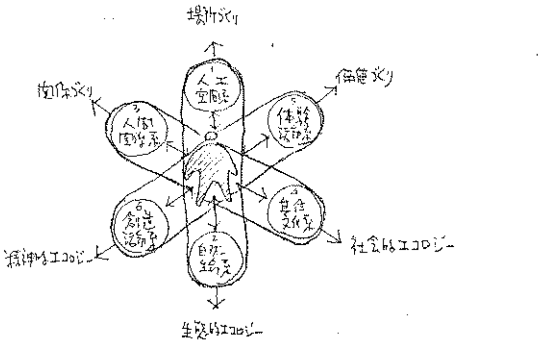


図　人間・環境系生成システム（当日の資料より）

質疑応答 意見交換

島(島正晃建築設計室)：小さい子どもたちの様子がお話でわかってきたが、反抗期の子どもたちの様子を聞かせて欲しい。

■三浦　単純なものではないと思うのですが、反抗の対象になるであろうものは、例えば親であったり、学校の先生だったりというふうな、何らかの対象ではないか。ただ単に世をすねている、というだけではないんだろうと思うのです。親には反抗的になっていても、隣のおじさんとか、隣のおばさんには、そのままぶつけるということは、あまりないですね。

　僕なんかも自分の経験から言って、やはり親父には一定の反抗心があったけれども、隣のおじさんに嚙みついたりするということは、あまりなかったような気がする。隣のおじさん、隣のおばさんの存在、あるいは小さな子どもたち、つまり自分の妹だったら蹴とばしたりもするかもしれませんが、隣の小さな子どもたちに「おねえちゃん」と呼ばれると、この子にはあまり邪険にできない。つまり、そうやって、緩和されるというのでしょうか、そういう作用というのはあるのではないかと思うのです。

■延藤　大家族というか、開かれた家族の中での経験では、ひょっとしたら反抗する精神が吸収されてしまっているのかな、という気がします。

難波(成建築設計事務所)：人が変わらないで住んでおられますか。

河田(東京工業大学)：時間の経過とともにコミュニティの形態も変化していくと思います。そのときに、もやい住宅は変化していくのか。

■延藤　ユーコートについて言えば、48世帯のうち4、5世帯が、転勤とか親と同居、また自営の工場を別途作られたとか、そういういくつかの理由で出た人はいます。それぞれ出た後は、次に誰が入るかというのを管理組合が中心になりながら、また出て行く人が中心になりながら、話し合って決める。全然見ず知らずの人を、不動産屋を介して入れるんじゃなくて、どういう人に入っていただくかというのを議論して入りますので、コミュニティの質としては、一応継承されています。

　ただ、非常に苦い経験は、48世帯のうちの1軒だけ、バブルの最もピークの時に売り逃げした人がいました。決して良いことずくめではない。48世帯の中で、そういう出来事は当然起こるわけですが、それでコミュニティにひびが入って崩壊していくのではなくて、そのことをきっかけに、余計強くなるといいますか、絆が強まるという結果になりました。

鈴木：例えば池とかに落ちて溺れかけるような子が出たり、有害なペットを池に捨てる人が出てきたりとか、そういうことがあった場合には、どのような処置をとられるのですか。管理費、修繕維持費といったものはどういう状態ですか。

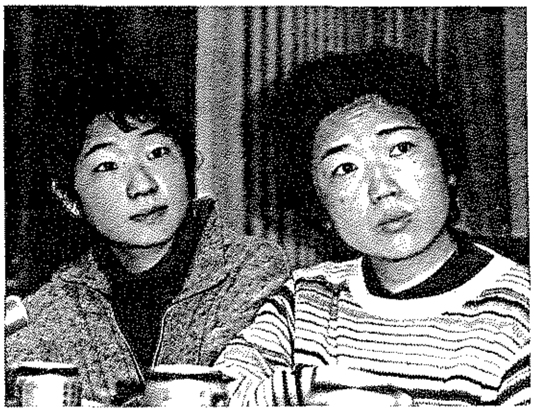
■延藤　池で怪我をしたり溺れたり、ということは起こっていません。というのは、囲まれた空間で、みんなのリビングルームが中庭の空間側に向いていまして、みんなの目が、中庭に向かうようになっているわけです。深さは２０㎝ほどで、浅いものです。

　緑の育成管理のプロセスにおいては、トラブルがいっぱいありました。ちょうど入居後1年目で、子どもが中庭で遊びすぎて、ものすごく緑が踏みつけられたのです。管理組合では、「あんなに緑を踏んづけられたら、緑が駄目になる、柵をしようじゃないか」という意見が出たのです。でも、「子どもがいま踏んづけているのは、子どもが緑についてよく知らないからではないか。子どもに、緑についてよく知らせよう」という提案があって、「中庭探検隊」というものが組織されました。造園設計をした設計者に、ここにはいまこんな花が咲いているとか、ここにはこんな緑があるとかいうのを一通り説明しながら、遊び心をもってガイドしてもらったのです。そういうことを繰り返しやりました。また、定期的に『中庭だより』というミニコミみたいなものを作りました。

　それが1年続きましたら子どもも、また緑に関心のなかった大人も、意識が変わっていったのです。緑を踏みつけられるから柵をする、という管理発想ではなくて、むしろ緑について、みんながもっとよく知ろう、知るために楽しい仕掛けをしようということがあったわけです。

　もう1つは、毛虫が増えたり、子どもが蜂に刺されたりしています。ある夏の夕方、小学校4年生の男の子が、あのうっそうとした草むらで、蜂の巣を見つけました。あるおばあちゃんに相談したところ、「ユーコートの中庭にいるのはアシナガバチや。アシナガバチは人間が悪いことせん限り絶対刺さへんねや。ここは虫も蜂も人間も、みんな一緒に生きる所や」と言われました。

　柔かい管理で、ユーコートには何でも住まわせよう、固い管理は危険だから取り除くという考えです。従来の大人の常識や発想を超えて、子どもが日常の経験の中で、



そういう危険なものとも接しながらでも、生命あるものと共に生きるということなんです。

管理費は、普通のマンションと一緒です。自前で維持管理していますから、非常に安いんです。でも、中長期修繕積立金というのは、普通のマンションと同じように積み立てています。

有路：コミュニティを育てるのに、ちょうどよい大きさのコーポラティブは何戸ぐらいだとお考えでしょうか。
種岡(都市計画同人)：いわゆる大規模なコミュニティ、小規模なコミュニティ、それぞれの長所、短所はどんなところだと感じておられますか。

■三浦　十方舎が10世帯、クラフトとクリブが9世帯、あるじゅが13世帯です。地域でその時期に何とか実現したいと願っている「人ありき」というところから始まるものですから、9世帯、10世帯というところで積極的な評価をしているわけではありません。ちょっと小さいと思っています。

どのぐらいが適当かというよりは、大きすぎるのは具合が悪いだろうと思っています。例えば何かトラブルが発生したときに、人の顔とその役割といいますか、そういったもの、総称して人の顔とでもいうのでしょうか、それが即座にみんなに認知できる、そういう範囲というのが、良い具合なんじゃないかなと思うのです。多分それは、30戸とか50戸とかという規模が、ギリギリのところじゃないかなと、個人的には思っています。例えば、100戸、200戸、あるいは300戸とか500戸とかという規模で考える場合でも、30戸から50戸ぐらいの群をいくつかつくり、それをつなぎ合わせていくというふうな形にしたらいいのではないか。

私どもは、埼玉県上尾市で共同建替えといって、元々そこに住んでいた人たちが、そのままそこに住み続けるというスタイルのものも応援しています。それなども、大きく網をかけるのではなくて、40～50戸ぐらいずつ、30戸から50戸ぐらいの規模で、連担してやっていき、それで継続しながらつながっていく。スタートから入居までの時間の問題もあるし、そういうことも考えてみると、そのぐらいが住み始めてからも、ちょうど良いぐらいかなというふうに思います。

■延藤　ユーコート48世帯を組み上げていく際、住民の中で何戸がいいかという話をしたときに、僕は6の倍数が意味があると言ったのです。日本人のコミュニティの原単位は向こう三軒両隣の6軒にあると。

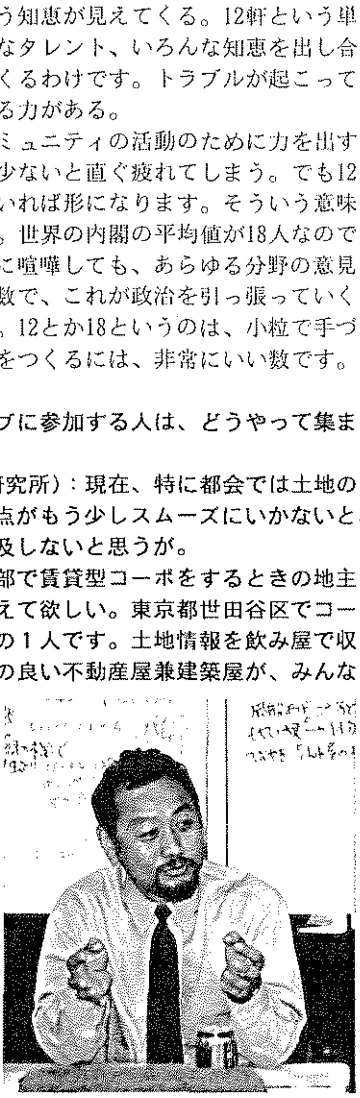
向こう三軒両隣で6、倍の12というのは、東京のクリブ、十方舎、大阪の「都住創」の高地価の所での10数軒のハウジング。そういうプロセスをかいま見ますと、もめたときに、いくら言い合っても崩壊しない、要するに言い合えるだけ言い合える、それには12軒がいいところではないか。24になるとどうなるか。12軒ではコモンというか、集会所を持つのがしんどい。24になるとお互いに5㎡ぐらいずつ持ち出して、共同の空間を豊かにしようかということになる。コミュニティを活性化させる舞台が出来上がる。併せて、直ぐさま挨拶が交わせるような近隣関係ができる。

その倍の48というのは、日本の伝統的な、自立した見事な景観を作り出した集落には、48戸が多いということなのです。48というのは、我が集落というスケールなんです。たまたまユーコートの敷地は、背後に高層、手前に戸建てがありましたから、その戸建ての景観と高層の極めて無機的な景観に対して、自分たちの柔らかい顔立ちのある景観をつくるためには48戸がいいという話になって48が生まれたのです。

6軒でもいいと言いましたが、やはりコミュニティが持続するためには、僕らのいままでやってきた経験知としては、10軒とか12軒というのが、最低規模ではないかと思います。12軒というのは、どういう意味を持っているかは、どんなに喧嘩をしても必ず収拾できる。それは何を意味しているかというと、価値観が同じ者が集まって別かれてしまうと、もう修復ができないのです。違う者同士が集まって、そして対立しても、また第3の意見が出てきて、また違う知恵が見えてくる。12軒という単位では、結構いろんなタレント、いろんな知恵を出し合える関係が生まれてくるわけです。トラブルが起こっても、それを乗り越える力がある。

また、毎月そのコミュニティの活動のために力を出すのは疲れます。数が少ないと直ぐ疲れてしまう。でも12軒あれば、半分出ていれば形になります。そういう意味で12軒とか18軒とか。世界の内閣の平均値が18人なのです。これは、どんなに喧嘩しても、あらゆる分野の意見が出し合えるという数で、これが政治を引っ張っていく内閣の単位なんです。12とか18というのは、小粒で手づくりのコミュニティをつくるには、非常にいい数です。

越智：コーポラティブに参加する人は、どうやって集まるのですか。
中村(地域総合計画研究所)：現在、特に都会では土地の取得は難しい。この点がもう少しスムーズにいかないと、コーポラティブは普及しないと思うが。
山下(風土社)：都市部で賃貸型コーポをするときの地主さんのくどき方を教えて欲しい。東京都世田谷区でコーポをやりたい数家族の1人です。土地情報を飲み屋で収集していますが、頭の良い不動産屋兼建築屋が、みんな



「せたがやの家（＊参照）」にしてしまいます。
■三浦　いままで我々が運営してきた例で言うと、基本的には人はやはり集まってくるものです。
「僕たちと一緒に住もうよ」という、つまり一緒に住んで、こういう夢が実現する。別に家を持つことが夢だという意味ではなくて、こういう生活を一緒にやれるといいじゃないかという、そういう持ちかけ方、要するに家を買うという感覚ではなくて、どういう生活をこれからしていくか、誰と一緒に、どこでどういうふうにして、これから生活するかというイメージを、飲みながら話をする、というスタイルでやってきたのが、いままでは多かったようです。
例えば、**クラフト**の場合には、私たちが公団の住宅に住んでいたのですが、そこで自治会などというのをやっていて、あるときに一杯やりながら、「家が狭くなったけれど、公団は増築できないし」というふうな話で、「我々は金はないし」というふうな話をしていて、「こんな方式だったらやれるかもしれないね」という、冗談半分みたいな話から、少しずつ話が進み始めて、「ひょっとしたらやれるかもしれないね」というふうになって、みんなで土地を探し歩いたのです。
やはり、人集めというのは、「自分と一緒にこれからの生活を考えていこうよ」というふうにして呼びかけ、それの核になる人がいる、この２本で大体いけるのだろうと思うのです。
クラフトでも、**あるじゅ**でも、途中で３世帯の入れ替えがありました。途中で交換があったと言っても、やはりいろんな条件があって、そういう判断をせざるを得ないということになるのですが、新しく入って来た人は、むしろ非常にコミュニティの中心に座る人が多いのです。方式だとか内容が、路線がかなり固まったところで入って来るものだから、呑み込みが早いというか、そういうことがあるのかもしれません。
いずれにしても、そういう形で、すべて誰も知らない人はいない。必ず誰かの友達、誰かと必ずつながっているという行き方ですから、互いに連帯保証をしているみたいな形ですので、そういう意味で人のつながりというのは強くなる。
■延藤　いまの山下さんの、飲みながらいろいろ土地の情報を集めておられる活動ぶりは、非常に面白いなと思って伺っていました。良い土地というのは、全部、「せたがやの家」にいってしまう。「せたがやの家」は、地主さんの土地を、良い賃貸住宅にする手立てとしては、いい仕組みを持っています。でも、それは非常に冷たいシステムです。住み手の気持ちがこもっていない。ただ基準どおりに造ったらお金を余計に貸してあげますと、ただそれだけの話で、公共が支援するものとしては弱い。

「せたがやの家」は、都市整備公社がいま担当していますが、今後温かい血の通ったシステムに再編成しないといけない、と思い直されています。
それは何かというと、地主が何のためにアパート経営をするのかということを考えてみる。これは、金目の話と、税金対策だけではなくて、やはり地域にあって、住み手とどう結び合うか、住み手とどう交流するか、地域社会の再創造にどう自分の土地が貢献するか、そういう視点を持とう。そのためには、地主の意識変えを図っていかないといけない。ユーザーのほうも、ただ良いものが安く手に入ればいい、という狭い意識ではなく、いろんな困難を自分たちで乗り越えながら進めていく。そういう住み手の参加の方式と、地主の参加の方式を、どう結び合わせるかというチャネルづくりを、「せたがやの家」の将来像として思い描いているようです。
環境学習が子どものための、というのがずっと意識にあったのですが、地主のための環境学習というのも要るなというのが、いまの山下さんの問題提起でわかりました。
これは自治体の仕事でもあるし、あるいは住民の方々が、良い地主とどう出会えるか。いままでは土地の情報は全部、経済のメカニズムの中でしか作動しなかったのを、もう少し子どもをどう地域で育てるのかとか、みんなが豊かな人間関係をつむぎ出すにはどうすればいいかとか、地主も年をとっていく中で、元気なピチピチした住み手に住んでもらうと、風邪をひいて地主が寝こんでいるときには、買物に行ってもらえるとか、ひょっとしたら車いすを押してくれる居住者が現れるかもわからないとか、そういう支え合う環境を作っていけるのではないか。
現代社会というのは、ドロドロして厄介なところが込み入っているのですが、この環境学習の話は、そういうところに光を当てる新しい切り口を見せつつあるな、というふうに思ったのですが、いかがでしょうか。

＊せたがやの家（借り上げ公共賃貸住宅）

中堅所得層や高齢者等への住宅供給施策として、建設省が実施する特定優良賃貸住宅供給促進制度を活用し、民間の土地所有者が建築した良質な賃貸住宅を、世田谷区都市整備公社が借り上げるものである。
世田谷区はこの事業に協力していただける民間の土地所有者に対して、設計費、既存木造賃貸住宅の除却費、共同施設整備費の一部に対する助成を行う。
また、入居者に対しても家賃負担の軽減を図る。
（世田谷区政概要'95より）

コーポラティブ住宅づくりが投げかける「緩やかなしくみ」の重要性

ー地域に開かれた教育という視点でー

小澤紀美子

最後に延藤先生がおっしゃったように、日本社会全体の在り様が、子どもたちの問題に結びついているというふうに、私は感じています。

文部省でも教育を学校だけでやるのは限界がある、ということに気がついています。どういうふうに地域に開かれた教育をしようかということで、文部省関係のある財団の報告書でも、そういった意識が非常に高く、子ども主体の学習への転換をしていかなければいけない、ということが出てきています。ちょうど今、中央教育審議会の委員会が発足して、そういった形を限られた時間の中でどういうふうに取り入れていこうか、ということを考えているわけです。学校教育は5日制になりますから、その中で、家庭と地域と学校の連携をどうするか、という辺りが、いま非常に問われているわけで、その1つの回答が、このコーポラティブ活動の中から出てきているのではないかと感じました。

それは、いろいろな課題とかそういうものに対して、子どもたちの意欲をどう引き出すかということ。これは、多分コミュニティのつながりの中から生まれてくるもの、かつては地域の中であった教育力ということに結びつくことではないか。また、豊かな学習としての学びの価値の転換です。いままでのように、先生たちが教え込むのではなく、やはり自分の意欲の中から、学ぶ意欲を引き出す。延藤先生が、心理学の言葉で言われたコンピテンスという概念が、それに該当してくるのだろうと思います。これが、やはり学びの価値の転換の1つです。

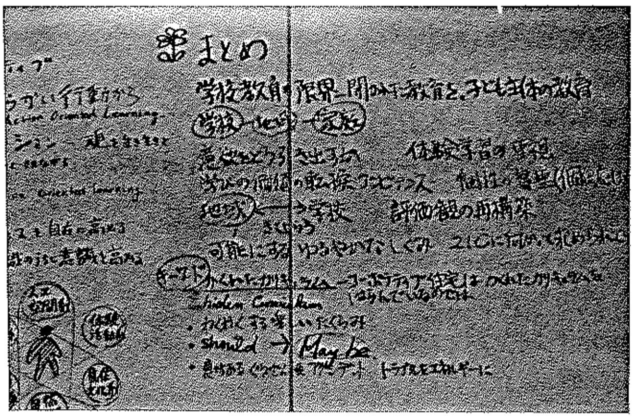
また、学校的な言葉ですが「学びがいのある多種多様な意図的学習材の開発」ということになっていくと思うのです。そして、それを地域に引っ張り出す、あるいは地域の方たちに学校に入ってもらおうという、そういう相互の中で共感し合うやり取りです。実は、福岡では環境学習の子どもたちが、地域のおじさんに来ていただいて、共に学び合うという場、あるいは教材を作っていこうということをやっています。また、子どもたちの体験学習を重視するということ。教師と地域の人と共同、分担しながらやっていこうという取り組みも始めています。多様に求められている、子どもたちの個性を伸ばすとか、最終的には生き方、自己実現が学校教育での課題だと思うのですが、それをどうするかは、もう学校だけでは限界があるわけですから、それを地域の人たちと共同していこうという、そういった視点からもやっていこうということです。

学校教育のいちばんの問題は、地域の評価がないということです。子どもを見る目、愛情ある目が必要なわけで、学校ではどうしても短期的な評価になっているわけです。いまこの子の学力がどうなっているか、ということで評価する。そういった評価観も再構築しなければいけないという視点に立って、いま見直しをしようとしている。ただし、日本人というのはまじめですから、霞が関でいろいろ考えても、末端のほうまでいくと、ものすごいマニュアルに縛られた、そういうものになっていくのであって、この住教育フォーラムでも、いままでの質問を伺っていると、そういう言葉が出ていたような気がするのです。それは、日本人全体に、いま問われていることではないかと、私は皆さんのやり取りを伺っていながら感じていました。

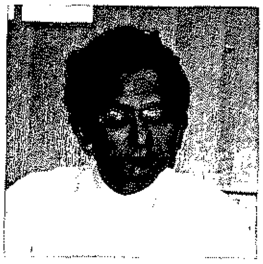
そういったものに対して、私たちもこたえていかなければいけないし、学校にも入っていく、あるいは地域でも、子どもとの交流を深める場をもっと作ってもいいのではないか。今まではどうも、すべてを学校におんぶする、あるいは教育の問題すべてを親にぶつけるという形で、何か責任転嫁をしていたような気がするのです。そこをもう少し緩やかな仕組みを作っていく。試行錯誤でやっていくということが、21世紀に向かって求められているのではないか。そういうことを、このコーポラティブ住宅づくりというのは、投げかけているのではないかという気がしています。

19世紀、あるいは18世紀の教育観、あるいは教育者は、皆さん建築のほうをやっていた人たちなのです。私たち建築の教育を受けてきた者は、総合的にものを見ていくという、あるいはインターラクションでものを見ていくという訓練をされてきた。あるいはものの思考の過程を訓練されていたのかな、という印象を持っています。

こういう活動が世の中に広がっていく、問いを投げかけていくきっかけに、おそらくなっていくのだろうと、期待をしています。



まとめのまとめ



隠れた環境学習のための３つの視点

ー楽しいたくらみ、自由ななりゆき、意味ある偶然性ー

延藤　安弘

前回、このフォーラムに、イギリスのアイリーン・アダムスさんがお見えになって、そのときの彼女のキーワードの１つに「ヒドゥン・カリキュラム(隠れたカリキュラム)」という言葉がありました。

コーポラティブ住宅は、隠れた環境学習プログラム、アダムスさんの言うヒドゥン・カリキュラムを生み出している状況が、今日の東西の事例の中に見られたと思うのです。

環境学習を、公的な学校教育のプログラムにどう乗せるかという、明示化されたカリキュラムの開発工夫も、もちろん大事だと思いますが、居住地において、何気なく日常の生活を通して、子どもたちが何か生きる上で大事なことを学んでいく、そういう隠れた環境学習プログラムという点では、３つのキーワードがあったかと思うのです。

１つは「ワクワクする楽しいたくらみ」というもの。予定された、あるきちんとしたプログラムではなく、むしろかかわる主体が、特に親世代が子どもに対して、積極的に何かを投げかける、たくらんでいくという、このたくらみの質が、実は子どもにとって、ワクワクする遊びの世界へ引っ張っていくのではないか。

２番目に、その状況の中で自由ななりゆき、というのを大事にしようということ。何々しなければならないという should の世界ではなくて、こうしたらこうなるかもわからないなあ、という maybe の世界に、みんな泳いでいこうではないか。状況の中で、自由ななりゆき、そういう柔らかい視点が大事だろうということです。

３つ目は、意味ある偶然性というものが生み出されていくということ。虫に刺されるとか、手を切るとか、そういう日常の出来事、ちょっとしたトラブルは、見方を変えればトラブルを消し去るという管理発想ではなく、トラブルを逆にエネルギーにして、子どもたちに、共に生きる価値を何気なく気づかせてやる。

そういう意味での、いわば意味ある偶然性、偶発性を生み出す、隠れた環境学習プログラム。そういったヒドゥン・カリキュラムという意味を内包している環境学習としてのコーポラティブ住宅が成立するためには、その主体として、やはり親世代が１つの世代で固まるのではなくて、できたら多世代が交流できること、そして子どもたちも異年齢の集団を作り得るように。場所として、舞台としての豊かな共同空間、ちょっとでも自分たちの専用空間を出し合いながら、共用の空間を豊かにする、そういう価値観に大人世代が向かっていくこと。そして、人工環境に、できるだけ生命ある自然を振りつけていく、自然を介在させていく。そういう舞台がセッティングされると、ヒドゥン・カリキュラムという仕組みが自ら立ち上がっていくのではなかろうか。そんなお話が、議論の合間に見え隠れしていたように思います。

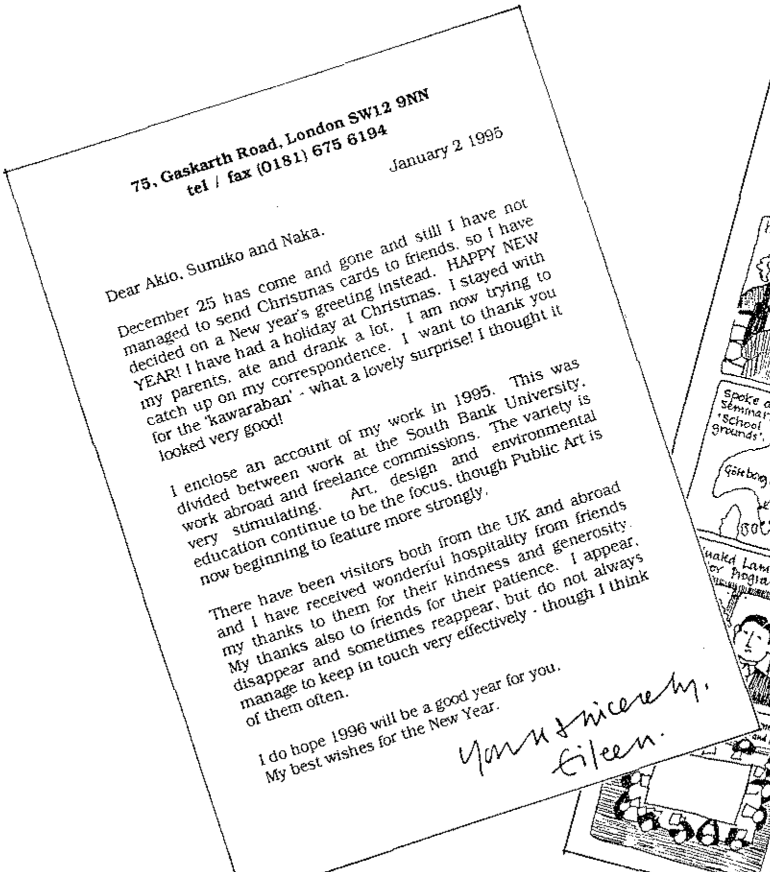
子どもだけではなくて、地主も巻き込んで環境学習の仕掛けをどう仕組んでいくかというのは、ちょっと今回のテーマからはズレるようで、実は環境学習は社会の、あるいは人の生き方全体を揺さぶっていき、あるシステムから逸脱させていく上に、重要なテーマとして、少し時をかけてお互いに反すうする機会が持てればと思っております。ありがとうございました。

第９回フォーラム講師

アイリーン・アダムスさんからお手紙が届きました！！

第９回フォーラムの記録を掲載した『住・まちづくりかわら版９号』をお送りしたところ、お手紙と１９９５年のアイリーンさんの活動報告をいただきました。

お手紙では、『かわら版』を、“what a lovely surprise !”と言って喜んで下さいました。また、活動報告からは、アイリーンさんのお仕事の幅の広さもうかがえます。



75, Gaskarth Road, London SW12 9NN
tel / fax (0181) 675 6194

January 2 1995

Dear Akio, Sumiko and Naka.

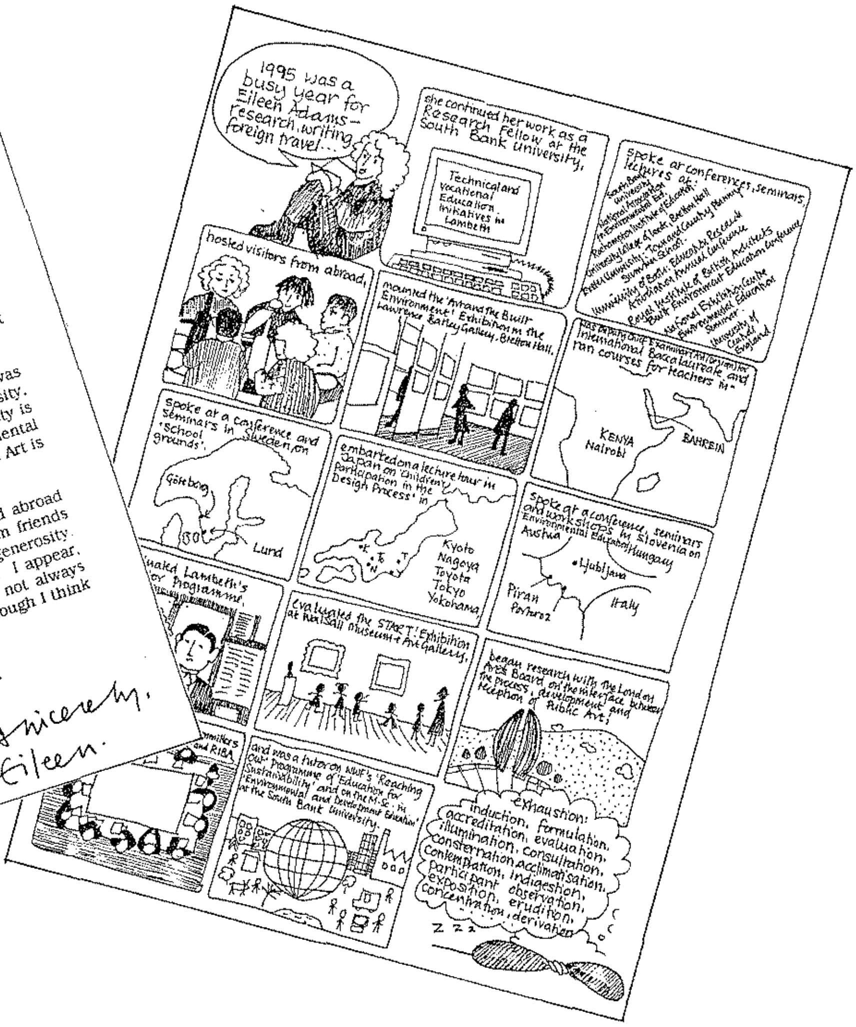
December 25 has come and gone and still I have not managed to send Christmas cards to friends, so I have decided on a New year's greeting instead. HAPPY NEW YEAR! I have had a holiday at Christmas. I stayed with my parents, ate and drank a lot. I am now trying to catch up on my correspondence. I want to thank you for the 'kawaraban' - what a lovely surprise! I thought it looked very good!

I enclose an account of my work in 1995. This was divided between work at the South Bank University, work abroad and freelance commissions. The variety is very stimulating. Art, design and environmental education continue to be the focus, though Public Art is now beginning to feature more strongly.

There have been visitors both from the UK and abroad and I have received wonderful hospitality from friends my thanks to them for their kindness and generosity. My thanks also to friends for their patience. I appear, disappear and sometimes reappear, but do not always manage to keep in touch very effectively - though I think of them often.

I do hope 1996 will be a good year for you. My best wishes for the New Year.

Yours sincerely,
Eileen.



現在、これまでのフォーラムの成果をまとめ、書籍として刊行する準備を進めております。
しばらくの間フォーラムはお休みいたします。
次回は夏ごろ開催予定です。その際には、また皆様にご案内いたします。

住・まちづくりフォーラムかわら版（仮題）　１０
１９９６年３月14日発行（非売品）

発行人　大坪　昭
発行所　財団法人　住宅総合研究財団
〒156　東京都世田谷区船橋4-29-8
TEL03-3484-5381　FAX03-3484-5794
事務局　間宮　昭朗、小菅寿美子、平井なか